

聖書に学ぶ悪の誘惑とその克服Ⅱ

第1回 誘惑に対する勝利のモデル

1 誘惑の克服という主題

第Ⅰ部において、創世記3章を通して、誘惑がどのような構造をもって人間に働くのかを見てきました。

そこでは、「疑い」「否定」「魅力」「自発的選択」という段階を経て、人間が誤った選択に至る過程が明らかにされました。

しかし聖書は、墮落の構造を示すだけで終わっていません。それに対する「克服の道」もまた提示しています。

その典型が、マタイによる福音書の4章に記されているイエスの試みの場面です。ここには誘惑に対する完全な勝利のモデルが示されています。

2 荒野における試みの意味

イエスは公生涯（30歳以降）を出発される前に、荒野において40日の断食をされました。その極限状態の中で悪魔の試みを受けられます。

この状況は偶然ではありません。荒野とは、旧約においてイスラエルが試された場所であり、人間の弱さが露わになる場です。

このことから、この場面は、イエスが何を基準として生きられるのかが試されると同時に、人間のあり方そのものを示しています。

その意味で、この試みは単なる個人的な出来事ではなく、「人間とは何か」「人間はどのようにして神に従うのか」という普遍的な問題を扱っています。ヘブル人への手紙4章15節にはこのようにあります。

この大祭司は、わたしたちの弱さを思いやることのできないようなかたではない。罪は犯されなかったが、すべてのことについて、わたしたちと同じように試練に会われたのである。（ヘブル人への手紙4章15節）

イエスは人間の弱さの外側からではなく、その内側において試みを受けられました。だからこそ、この勝利は人間にとっての克服のモデルになるのです。

3 三つの試みの構造

この場面には三つの試みが記されています。

第一は、「石をパンに変えよ」という試みです。第二は、「神殿から身を投げよ」という試みです。第三は、「世界のすべてを与えるから拝め」という試みです。

一見すると異なる内容のように見えますが、これらはそれぞれ人間の根本的な欲求に対応しています。

すなわち、生存と欲求（食）、安全と保証（守られること）、支配と栄光（力と成功）という三つの領域です。これは、人間の内面に働く誘惑の典型的なパターンと言えます。

4 創世記との対照構造

ここで重要なのは、この三つの試みが創世記の3章の構造と対応しているという点です。

創世記においてエバは、「食べるに良く」「目に美しく」「賢くなるに好ましい」と判断しました（創世記3章6節）。

これに対してイエスは、同じように欲求・安全・価値に関わる試みを受けながらも、それに従われませんでした。

すなわち、エバは誘惑に従いましたが、イエスは誘惑に勝利されたという対照がここにあります。

このような意味で、マタイによる福音書4章は、創世記3章とは対照的なパターンを示していると読むことができます。

5 すべてに共通する対処の仕方

さらに注目すべきは、イエスの対処の仕方です。三つの試みに対して、イエスはすべて同じ形で語られています。

第一の試みに対しては「『人はパンだけで生きるものではない』と書いてある」（4章4節）、第二の試みに対しては「『あなたの神である主を試みてはならない』とまた書いてある」（4章7節）、第三の試みに対しては「『あなたの神である主を拝し、ただ主に仕えよ』と書いてある」（4章10節）と語られました。

このように、イエスはすべての試みにおいて、「～と書いてある」として、申命記のみ言をもって語られました。

すなわち、イエスは自らの感情や状況判断によってではなく、神のみ言を基準として語られたのです。この点が決定的に重要です。

つまり、エバはみ言を自分で判断する対象としましたが、イエスは、すべての判断をみ言に委ねられたのです。

前者が「み言を判断すること」であるのに対して、後者は「み言によって判断すること」です。この違いが誘惑を克服できるかどうかを決定します。

6 誘惑と克服の原理

誘惑は、単に意志の弱さによって起こるものではありません。それは構造をもって人間に働きかけます。

そしてその構造に対しては、対応する原理が必要です。イエスが示されたのはその原理です。すなわち、誘惑はみ言によってのみ断ち切られるということです。

ここで重要なのは、イエスが誘惑と議論をしていないという点です。また、自分の力で耐えようともしていません。ただ一つのこと、すなわち神のみ言に立つことによって勝利されているのです。

7 結論—勝利のモデルとしてのイエス

マタイによる福音書の4章におけるイエスの試みは、単なる模範ではありません。それは誘惑に対する勝利の原理そのものを示しています。

創世記において人間が失敗した構造を、イエスは完全に逆転されました。そしてその中心にあるのが、「み言を基準とする」という一点です。

ここに誘惑の克服の道があります。すなわち、人間が自らの判断に頼るのではなく、神のみ言に立つとき、初めて誘惑に対して真の意味で勝利することができるのです。

この視点をもって、次回以降、三つの試みを一つ一つ詳しく見ていきます。

第2回 第一の試み

1 最も現実的な誘惑

マタイによる福音書4章における第一の試みは、非常に現実的であり、同時に最も理解しやすい形で提示されています。

「もしあなたが神の子であるなら、これらの石がパンになるように命じてごらんください」。(マタイ福音書4章3節)

この試みが行われたときの状況を考えると、その意味はより鮮明になります。イエスは40日断食を終えた後であり、極度の空腹状態にありました。

このようなときに「石がパンになるように命じてごらんください」と言われることは、不自然どころか極めて当然の要求に見えます。ここにこの試みの本質があります。

これは明らかに悪の道へといざなう誘惑ではなく、「正当な欲求」に対する誘惑です。

2 欲求そのものは悪ではない

まず確認すべきことは、食べること自体は何ら罪ではないという点です。人間は生きるために食べる必要があります。

したがって、「空腹を満たす」という行為は、本来正しいものであり、否定されるべきものではありません。

問題は欲求そのものではなく、その欲求がどの位置に置かれるかです。

この試みにおいて問われているのは、「パンを食べるかどうか」ではなく、「何を基準として行動するのか」という点です。

すなわち、欲求に従うのか、それとも神のみ言に従うのかという問題なのです。

3 イエスの言葉に示された基準

この試みに対して、イエスは次のように語られました。

「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。(マタイ福音書4章4節)

ここで引用されているのは申命記8章3節の言葉です。この箇所は、イスラエ

ルが荒野でマナによって養われた経験を振り返る文脈で語られているものです。

荒野において、人々は自分の力で食物を確保することができませんでした。その中で神は、日ごとに必要な糧を与えられました。

しかしこの箇所では申命記が強調しているのは、単に神が食物を与えたという事実だけではありません。神はあえてイスラエルを飢えさせてからマナを与えられました。

それは、「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きる」ということを教えるためでした。すなわち、飢えそのものが、人間の生の基準を問い直すための神の働きかけだったのです。

この経験を通して示されているのは、人間は物質的なものだけで生きているのではないという真理です。

イエスはこの言葉によって、目の前の空腹よりも優先されるべき基準を明確に示されました。

4 優先順位の問題としての誘惑

ここで重要なのは、イエスがパンを否定されたわけではないという点です。実際、後にイエスは人々にパンを与える奇跡も行われています。（マタイによる福音書 14 章 13～21 節）

したがって問題は、「パンを得ること」そのものではありません。問題はそれをどのような基準で行うかです。

この試みにおいて悪魔は、「神の子ならば」という前提を用いながら、自らの力を用いて欲求を満たすように促しています。

これは一見合理的に見えますが、その実質は、「神の導きに従うことなく、自分の判断で満たせ」というものです。

ここにおいて、第一の試みにおける誘惑は、イエスを「欲求を満たすこと」に導こうとするものではなく、「欲求を基準に行動すること」へと導こうとしているのです。

5 創世記との対応

この構造は創世記 3 章と明確に対応しています。

創世記においてエバは、「その木は食べるに良い」と判断しました（創世記 3 章 6 節）。ここでもまた、「食べること」が出発点となっています。

しかしそのとき、エバの判断の基準は「見て良いと思うかどうか」に置かれていました。

それに対してイエスは、「み言」によって判断されました。同じ「食」に関わる場面でありながら、基準の置き方が異なることによって、結果は完全に逆転しています。

6 現代における具体的な適用

この試みは現代の生活とも深く関わっています。

私たちは日々、必要や欲求に基づいて判断を行っています。生活の安定、収入、安全、健康といったものは、いずれも正当な関心です。しかし、それらが最終的な基準となるとときに問題が生じます。

たとえば、「生活のためだから仕方がない」「安全のためにはこれが必要だ」といった考えは、一見合理的に見えます。しかしその背後で、何が基準となっているのかが問われなければなりません。

もし必要や欲求が最終基準になれば、人間はそれに従ってあらゆる選択を正当化することが可能になります。ここに第一の試みが、現代においても意味をもつ理由があります。

イエスはこの問題について、山上の説教においても「あなたがたは、神と富とに兼ね仕えることはできない」（マタイ福音書 6 章 24 節）と明確に語られています。

そして、続けて「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ福音書 6 章 33 節）とあります。

欲求や必要を否定するのではなく、何を基準とするかという優先順位の問題として語られているこの言葉は、第一の試みの原理と完全に一致しています。

7 結論—欲求を超える基準

「人はパンだけで生きるものではない」という言葉は、単なる精神論ではありません。それは、人間の生の基準がどこにあるのかを示す言葉です。

人間は物質によって生きる存在であると同時に、それを越えた基準によって生きる存在でもあります。その基準こそが神のみ言です。

第一の試みにおいて示されたのは、この優先順位です。すなわち、必要や欲求がどれほど正当であっても、それが基準となることはないということです。

ここに誘惑に対する第一の勝利の原理があります。すなわち、人間は欲求に従う存在ではなく、み言によって生きる存在ということです。

第3回 第二の試み

1 最も見分けにくい誘惑

マタイによる福音書4章における第二の試みは、第一の試み以上に見分けるのが難しいものです。

「もしあなたが神の子であるなら、下へ飛びおりてごらんなさい。『神はあなたのために御使たちにお命じになると、あなたの足が石に打ちつけられないように、彼らはあなたを手でささえるであろう』と書いてありますから」。(マタイ4章6節)

ここで注目すべきは、悪魔が聖句を引用しているという点です。すなわち、この試みは露骨な悪ではなく、信仰的に正しく見える形をとっています。

このため、この試みは単なる誘惑ではなく、信仰そのものが試される場面と言えます。

2 聖句が用いられるという問題

悪魔が引用しているのは詩篇91篇11～12節の言葉です。本来それは、神が人を守られるという約束を示すものであり、信仰を支える重要なみ言です。

しかしここでは、そのみ言が別の目的のために用いられています。すなわち、「自ら身を投げる」という行為を正当化するために使われているのです。

ここに重要な問題があります。み言そのものは真実であっても、その使い方が誤っているならば、それは真理として機能しないということです。

したがって、問題は「聖句を知っているかどうか」ではなく、「どのように用いるか」にあるのです。

3 「神を試す」とは何か

この試みに対して、イエスは次のように語られました。

「『主なるあなたの神を試みてはならない』とまた書いてある」。(マタイ4章7節)

ここで引用されているのは、申命記6章16節の言葉です。この箇所は、イスラエルが荒野において神を試みた出来事を背景としています。

イスラエルは、「神が本当に共におられるのか」を確かめようとしていました。しかしその行為は、信仰ではなく不信の表れとされました。

イエスはこのみ言によって、「神を試す」という行為そのものを退けられました。ここで問われるべきは「神を試す」とは何かという点です。

それは単に神に求めることではありません。祈りや願いは、信仰において重要な要素です。

問題は、「自分の望む結果を引き出すために神を用いる」という態度です。

すなわち、神に従うのではなく、神を自分に従わせようとする、この逆転が起こるとき、それは信仰ではなくなります。悪魔の提示した試みは、まさにこの方向でした。

つまり、神の約束を根拠にして、自分の行為を正当化し、神にそれを支えさせるという構造です。

4 信仰の形をした自己中心性

この試みの本質は、信仰の形をとった自己中心性にあります。一見すると、神を信じて大胆な行動をとるようにも見えます。

しかしその実質は、「自分の考えや行動を神によって裏づけさせる」というものです。ここにおいて、信仰は目的ではなく手段となっています。

これは非常に重要な問題です。なぜなら、外見上は信仰的に見えるため、誤りであることに気づきにくいからです。この意味で、第二の試みは最も深いレベルでの誘惑と言えます。

エレミヤ書7章4節には、「『これは主の神殿だ、主の神殿だ、主の神殿だ』という偽りの言葉を頼みとしてはならない。」とあります。

神殿という信仰の象徴を、自分の安全のための根拠として用いることに対する警告です。

信仰の形をとりながらその実質を失うという問題は、時代を超えて聖書が繰り返し告発してきたものです。

5 現代における適用

この構造は、現代においてもさまざまな形で現れます。

たとえば、ある行動や判断に対して、「神がそう導かれた」「聖書にもこう書いてある」といった言葉が用いられることがあります。

しかしそのとき、本当に問われるべきは、その言葉がどのような文脈で用いられているかです。

もしそれが、自らの願いや判断を正当化するために使われているのであれば、

それは第二の試みと同じ構造を持つことになります。

また、「信仰があるならこうするべきだ」「大胆に行動することが信仰だ」といった考え方も、場合によっては同様の問題を含みます。

信仰とは、自分の行動を神に承認させることではなく、神の御心に従うことだからです。

6 結論—信仰をめぐる誘惑

第二の試みにおいて明らかになるのは、信仰そのものが誘惑の対象となり得るという事実です。

すなわち、信仰は正しく用いられるときには人を導きますが、誤って用いられるときには、人を誤った方向へ導く力にもなり得ます。

ですから、重要なことは、何を信じているかだけでなく、どのように信じているかという点です。

イエスは、み言を自分のために用いるのではなく、み言に従う立場を貫かれました。ここに第二の試みに対する勝利の原理があります。

つまり、信仰とは神を自分の願望のために用いることではなく、神に従うことであるということです。

第4回 第三の試み

1 最も本質的な誘惑

第三の試みは、三つの試みの中で最も本質的な問題に触れています。

「もしあなたが、ひれ伏してわたしを拝むなら、これらのものを皆あなたにあげましょう」（マタイ4章9節）

ここでは、世界のすべての国々とその栄華が提示されています。これは単なる物質的な誘惑ではありません。支配、成功、権力、名誉といった、人間が求め得る最大の価値が示されています。

この試みの特徴は、その規模の大きさにあります。第一の試みが「パン」、第二が「安全」であったのに対し、ここでは「世界そのもの」が対象となっています。

2 提示される価値の正当性

ここで重要なのは、提示されているものが、一見すると価値あるものに見えるという点です。

世界を治めること、秩序をもたらすこと、成功を収めること自体は、必ずしも否定されるものではありません。

詩篇8篇6節には「これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました」とあります。

人間が被造世界を管理し、善い秩序をもたらすことは、本来神が与えた使命でもあります。

むしろ、それらは正しい形であれば良いものとなり得るのですが、問題は、それがどのような条件で与えられるかです。

悪魔は、「拝むならば与える」と語ります。すなわち、ある対象にひれ伏すことと引き換えに価値が与えられるという構造です。

ここにおいて、問題は行為そのものではなく、「礼拝の対象」にあります。このとき問われているのは、何を求めるかではなく、「誰を拝するのか」という問題です。

3 イエスが示された基準

この試みに対して、イエスは明確に語られました。

「サタンよ、退け。『主なるあなたの神を拝し、ただ神にのみ仕えよ』と書いてある」。(マタイ4章10節)

ここで引用されているのは、申命記6章13節の言葉です。この一言によってすべてが明確になります。

すなわち、人間が何を求めるかは、「誰を拝するのか」によって決まるということです。

イエスは、どれほど大きな価値が提示されても、礼拝の対象を変えることはされませんでした。

4 礼拝とは何か

ここで改めて「礼拝」とは何かを考える必要があります。

礼拝とは単に宗教的な儀式を指すものではありません。それは、最も価値あるものとして何を認めるかという問題です。

人間は必ず何かを最終的な基準として生きています。それが神である場合もあれば、それ以外のものである場合もあります。

したがって、「何を拝するか」という問いは、「何を基準として生きるか」という問いと同一です。この意味で第三の試みは、人間存在の中心的な問題に触れています。

イエスはヨハネによる福音書4章24節において、「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである」と語られました。

礼拝は形式ではなく、何を最終的な実在として認め、それに向かって生きるかという問題です。この意味において、すべての人間は常に何かを礼拝していると言えます。

5 偶像という現実

この問題は現代においても極めて具体的です。

古代において偶像は目に見える形をとっていましたが、現代においてはより内面的で抽象的な形をとっています。

たとえば、金銭、成功、地位、評価、あるいは自己そのものが、最終的な価値として扱われることがあります。

これらは本来、手段として用いられるべきものです。しかしそれが最終的な目的となると、それは偶像となります。

それを求めるために他のものを犠牲にする、それによって自分の価値を測る、そ

れなしには生きられないと感じる。このような状態に至ったとき、それはすでに礼拝の対象になっているのです。

6 選択の本質

第三の試みにおいて示されているのは、極めて単純でありながら決定的な選択です。

それは、神を拝するのか、それ以外のものを拝するのかという選択です。

この選択は、外面的には些細なものに見える場合もありますが、その結果は、人間の生き方全体を決定します。

なぜなら、何を拝するかによって、何を優先し、何を選び、どのように生きるかが決まるからです。

7 結論—何を礼拝の対象とするかによってすべてがきまる

第三の試みにおいて明らかになるのは、人間は必ず何かを拝しているという事実であり、その対象が人間のすべてを決定します。

イエスは、「ただ神にのみ仕えよ」という言葉によって、この問題に対する明確な基準を示されました。

どれほど大きな価値が提示されても礼拝の対象を変えない。これによって、誘惑に対する最終的な勝利が確定するのです。

第5回 み言によって立つということ

1 三つの試みに見る共通構造

三つの試みを振り返ると、それぞれが異なる領域に関わりながらも、共通する一つの構造を持っていることが分かります。

第一の試みは、欲求と必要に関わるものでした。

第二の試みは、信仰と神との関係に関わるものでした。

第三の試みは、礼拝と最終的な価値に関わるものでした。

すなわち、何によって生きるのか、どのように神と関わるのか、何を最も価値あるものとするのかという、人間の根本に関わる問いが、三つの試みとして提示されていたのです。

これらに共通しているのは、いずれも「何を基準として選ぶのか」が問われているという点です。

第一の試み（パン）：欲求を基準にするか、み言を基準にするか

第二の試み（神殿）：自分の考えで神を扱うか、み言に従うか

第三の試み（礼拝）：何を最終的な価値・基準とするか

そしてこれらすべてにおいて、イエスは、一貫して神のみ言を基準として判断し、行動されたのです。

2 なぜ申命記が用いられたのか

三つの試みにおいて、イエスが語られた言葉はすべて申命記からの引用でした。

申命記は、イスラエルが荒野の経験を経て、約束の地に入る直前に与えられたみ言であり、どのように神に従って生きるべきかを改めて示した書です。

荒野においてイスラエルは、欲求に従い、神を試み、神以外のものに心を向けるという失敗を繰り返しました。

しかしイエスは、その同じ荒野において、同じ領域の試みを受けながら、すべてにおいて神のみ言に従われました。

ここにおいてイエスは、単に誘惑に耐えたのではなく、イスラエルの失敗を乗り越え、神の御心に完全に一致する姿を示されました。

3 「～と書いてある」という姿勢

さらに、三つの試みにおいて共通しているのは、イエスが「～と書いてある」と語られたことです。

この言葉は、神のみ言に従って自らの判断を下すという姿勢を示しています。

空腹であっても、危険な状況に置かれても、大きな価値が提示されても、判断の基準は一度も揺らぎませんでした。

ここに示されているのは、感情でも状況でもなく、み言こそが最終的な基準であるという姿勢です。この姿勢はヨシュア記 1 章 8 節の言葉と一致します。

この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜もそれを思い、そのうちにしるされていることを、ことごとく守って行わなければならない。そうするならば、あなたの道は栄え、あなたは勝利を得るであろう。（ヨシュア記 1 章 8 節）

み言を離さないという姿勢がすべての判断の基盤となるという原理は、一貫して旧約から新約へと継承されています。

4 イエスの勝利の本質

ここで重要なのは、イエスの勝利が単なる道徳的な勝利ではないという点です。

イエスは、エデンの園のアダムとエバによって失われた人間の位置を、再び正しく立て直されました。すなわち、み言を基準として生きるという本来の姿を完全に示されたのです。

この意味で、イエスの試みの勝利は、人間がどのようにして神のもとに復帰するかという道を示しています。この原理は現代においてもそのまま適用されます。

人は日々、欲求、状況、価値の中で判断を行っていますが、そのとき、何を基準としているかによって結果は大きく異なります。

感情や状況に基づく判断は変化しますが、み言に基づく判断は変わりません。

したがって、み言を基準とするとは、単に聖句を知ることではなく、日常生活において、常にみ言によって判断し、行動することを意味します。

5 結論—み言によって立つ

三つの試みを通して明らかになるのは、誘惑に対する勝利が偶然ではなく、明確な原理に基づいているということです。その原理は単純です。み言によって立

つことです。

人間が自らの判断を中心に置くのではなく、神のみ言を最終的な基準とするとき、誘惑はその力を失います。

そしてこのとき、人間は本来与えられていた祝福の位置へと復帰していくのです。

誘惑は意志の強さではなく、み言の基準によって克服される。ここに創造から墮落、そして復帰へと至る道が示されています。

補講 I 誘惑のタイミング

1 断食後に行われた誘惑の意味

第一の試みを改めて見ると、見落としてはならない重要な点があります。それは、この誘惑が断食中ではなく、断食が終わったあとに行われているという点です。

四十日四十夜、断食をし、そののち空腹になられた。（マタイによる福音書 4章2節）

もしこの誘惑が単に断食をやめさせるためのものであれば、断食の最中、最も肉体的に厳しいときに働きかけたはずですが。

しかし実際にはそうではありません。あえて断食が終わったあと、すなわちパンを食べてもよい状況において誘惑が行われています。この点は、この試みの本質を示す重要な手がかりです。

2 誘惑が断食中でなかった理由

断食中であれば、「今は断食中である」という明確な理由によって、その誘惑を退けることができます。すなわち、パンを食べないこと自体が神に従う行為であり、行動の基準はすでに定まっている状態です。

このような状況では、たとえどれほど強い誘惑があったとしても、それは外面的な理由によって退けることが可能です。その場合に問われるのは、人間的な忍耐力や意志の強さです。

しかし断食が終わったあとには、その状況が大きく変わります。もはやパンを食べること自体は正当であり、行為の是非という点では問題がなくなります。

すなわち、外面的な理由で誘惑を退けることはできない状況になるのです。

3 問われていたのはみ言かパンかの優先順位

このような状況において初めて明らかになるのは、何を優先するのかという問題です。すなわち、肉体の欲求を満たすパンを優先するのか、それとも神のみ言を優先するのかという選択が問われていたということです。

サタンはまさにこの点を突いて、「石をパンに変えよ」と語りかけました。この言葉は一見すると合理的であり、状況にも合致しているように見えます。

しかしその実質は、神のみ言ではなく、自分の判断を基準として空腹を満たす

行動をするように促すものでした。

ここにおいてサタンの誘惑の本質が明確になります。それは単に誤った行為を行わせることではなく、正当な行為を自分の判断によって行わせ、神のみ言を基準としないようにすることです。

これは、誘惑の構造における「自発的選択」の段階と対応します。サタンは、人間自身が「自ら判断してよい」「自ら行動してよい」という状況をつくり出すことによって、その選択の基準をみ言から切り離そうとするのです。

4 イエスの答えに示された基準

この試みに対するイエスの答えは次のようなものでした。

「『人はパンだけで生きるものではなく、神の口から出る一つ一つの言で生きるものである』と書いてある」。(マタイによる福音書 4章 4節)

パンは人間にとって必要なものであり、すでに断食を終えたあとだったので、パンを食べること自体は正当です。しかしイエスは、それを自らの判断で行うことを拒まれました。

それはサタンの言葉に従って行うことになるからです。ここに神のみ言を基準として判断し、行動されるイエスの姿が示されています。

5 結論—許されているときにこそ試される信仰

この第一の試みを通して見えてくるのは、誘惑が単に禁止されていることを行わせるものではないということです。むしろ、許されている状況においてこそ、その人が何を基準としているのかが問われるのです。

サタンが断食中ではなく、あえて断食後の、すでにパンを食べてもよい状況を選んで誘惑してきたのは、この点を明らかにするためだったと言えます。

すなわち、肉体の欲求を満たすパンを優先するのか、それとも神のみ言を優先するのかという選択こそが、この試みにおいて問われていた核心なのです。

そしてイエスは、この問いに対して、一貫して神のみ言を基準として立たれました。

ここに誘惑に対する最も基本的な原理が示されています。すなわち、人は状況や必要によってではなく、神のみ言によって生きるべき存在であるということです。

補講Ⅱ 誘惑の第2段階

1 繰り返される誘惑

ルカによる福音書4章13節には、イエスが三つの試みを受けられた後について、「悪魔はあらゆる試みをしつくして、一時イエスを離れた」と記されています。

ここで重要なのは、「一時イエスを離れた」と記されている点です。すなわち、誘惑はこの場面で終わったのではなく、形を変えて続いていくものであることが示されています。

このことは、誘惑が一回限りの出来事ではなく、機会をうかがいながら繰り返されることを意味しています。

2 直接から間接へと変わる誘惑

荒野においてサタンは、イエスに直接働きかけましたが、その方法が通用しないと分かると、別のかたちで近づくようになります。

その一つの例が、ルカによる福音書22章3節に記されている「イスカリオテと呼ばれていたユダに、サタンがはいった」という出来事です。

さらに、マタイによる福音書16章23節では、イエスはペテロに向かって「サタンよ、引きさがれ」と言われました。

この言葉は、ペテロその人を否定したのではなく、ペテロを通して語られた神の御心に反する思いを退けられたものです。ここに人を通して間接的に働く誘惑の構造が明確に現れています。

3 誘惑の第2段階

このように考えると、誘惑には段階があることが分かります。すなわち、最初には本人に直接働きかけますが、それが通用しない場合には、身近な人を通して間接的に影響を与えるという形に移行するのです。

このような働きは、個人だけでなく共同体全体にも及びます。実際にイエスは、「サタンはあなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って許された」（ルカによる福音書22章31節）と言われました。

ここで語られている「あなたがた」は複数であり、誘惑が人間関係や集団の中で広がる性質を持つことが示されています。

一般的に私たちは、自分自身に対しては警戒心を持つことができても、信頼している人が語った言葉に対しては無防備になりやすく、その結果として、無批判に受け入れてしまうことが少なくありません。

4 善意の言葉に潜む危険

マタイによる福音書の 16 章 22 節で、ペテロが語った言葉はイエスを思う善意から出たものでした。「そんなことがあるはずはございません」という言葉は、人間的に見れば自然であり、理解しやすいものです。

しかしイエスは、それを神の御心ではなく人間の思いに基づくものとして退けられました。

ここに明らかなように、言葉の動機が善意であったとしても、その基準が神のみ言と一致していなければ、それは人を誤った方向へ導く働きとなり得るのです。

また、誘惑は外からの圧力としてだけでなく、内側の思いとしても働きます。

ヨハネによる福音書 13 章 2 節には、「夕食のとき、悪魔はすでにシモンの子 イスカリオテのユダの心に、イエスを裏切ろうとする思いを入れていた」と記されており、ここに誘惑が人の内面に入り込む構造が示されています。

5 創世記 3 章の場合

この構造は創世記の 3 章にも見られます。へびはエバに語りかけ、その言葉を受け入れたエバがアダムに与えました。すなわち、誘惑は一人の内にとどまるのではなく、関係を通して広がっていく性質を持っています。

この場面で、アダムもまた、エバから渡されたものをみ言によって吟味することなく受け取りました。すなわち、誘惑はエバの内にとどまらず、アダムへと連鎖したのです。

このような連鎖が起きたのは、どちらもみ言を基準として受け取る者の立場に立てていなかったからです。

このとき重要なのは、影響の出発点ではなく、それを受け取る側の基準です。

外からどのような言葉が語られるかも重要ですが、それ以上に重要なのは、その言葉をどのような基準で判断し、受け止めるかです。

同じ言葉であっても、恐怖に基づいて受け取るのか、み言に基づいて吟味するのかによって、人の思考と行動は大きく変わっていきます。

そしてこの誘惑は、必ずしも悪として現れるとは限りません。コリント人への

第二の手紙 11 章 14 節に「サタンも光の天使に擬装する」とあるように、それは一見すると善いものとして現れることもあるのです。

6 現代における誘惑

現代においても、このような形での影響は日常的に見られます。

たとえば、「それくらい問題ないのではないか」「そこまで厳しく考える必要はないのではないか」といった言葉は、一見すると現実的でもっともらしく聞こえますが、その背後にある基準が問われなければなりません。

人の言葉は、しばしば状況や感情に寄り添うかたちで語られますが、それが神のみ言に一致しているかどうかは別の問題です。

したがって、誘惑を見分けるための基準は一つに集約されます。それは、その言葉や考えが神のみ言に一致しているかどうかという点です。

人を通して語られるものであっても、それがみ言にかなっているならば受け入れられるべきであり、そうでないならば退けられなければなりません。

この点について聖書は、「すべての霊を信じることはしないで、それらの霊が神から出たものであるかどうか、ためしなさい。多くのにせ預言者が世に出てきているからである」（ヨハネの第一の手紙 4 章 1 節）と教えています。

この基準が保たれているときにのみ、人は外からの影響に流されることなく、自らの歩みを守ることができます。

7 結論—誘惑は形を変えて続いていく

荒野の試みは終わりましたが、誘惑そのものは終わってはいません。それは直接的な働きから間接的な働きへと姿を変えながら続いていきます。

ペテロの第一の手紙 5 章 8 節が語るように、「身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししののように、食いつくすべきものを求めて歩き回っている」のです。

そして、その本質は変わることがありません。すなわち、神のみ言を基準とするのか、それとも人の思いを基準とするのかということが、常に私たちに問いかけられているのです。